

# 講義型授業において学生の主体的学びを支援する試み

## ——グループ・ディスカッションを活用した講義改革——

小野原 雅夫・岩崎 紀子

(福島大学教育学部)

本報告は、小野原が福島大学教育学部において2003年度前期に開講した「倫理学概論Ⅲ」の中で新たに実施した試みを紹介するものである。小野原は、講義型授業の中で学生の主体的学びをどうやって保障したらいいのかという関心のもと、「ワークシート&フィードバック」、「グループ・ディスカッション&プレゼンテーション（以下、G.D.&Pr.と略記）」という2つの手法を取り入れて講義を展開した。前者に関してはすでに報告済みである（『京都大学高等教育研究』第9号）。本発表ではG.D.&Pr.について、授業者である小野原自身と、この授業を半年間参観した岩崎とが、それぞれの立場から分析・報告していく。

### 1. グループ・ディスカッションのねらい

小野原が本講義においてG.D.という手法を採用した主たる目的は、(1)自分の思いや感じを、他者に向かって直接自分のことばで表現させること、(2)他者の生きたことばに耳を傾けることによって、自分の思いや感じを別の視点から相対化し、思いや感じを「考え」へと深めさせること、の2点である。しかも、全体でのディベートや討論という形態ではなく、G.D.という形態を選択したのは、(3)他の誰かではなく自分が語らなければならない状況に追い込むよう、「聴く\*語る」という経験を共有しうる最適な規模での話し合いの場を提供するため、(4)今回は受講者約80名という講義であったが、クラス規模の大小にかかわらず実践できるような参加型授業の手法を確立するためであった。

G.D.を行わせるにあたっての実施上の留意点は、(1)グルーピングは授業者の側で行い、1グループを5~6人構成にし（結果的に13グループとなる）、グループごとで構成員の男女比・学年・専攻分野に大きな偏りが出ないようにする、(2)論題については事前に宿題を提示し、G.D.を行うことを予告しておくことによって、各自に「自分の思いや感じ」をつくるための時間を確保しておく、という2点であった。

### 2. 3回のグループ・ディスカッションの概要

「倫理学概論Ⅲ」は〈戦争と平和の倫理学〉というテーマで計13回行われた。講義初日のガイダンス後、講義2回目から4回目までに「戦争とは何か」という定義問題や「戦争の変化」について、ワークシートを用いて各自考えさせた後で小野原が講義を行い、さらにワークシートで各自自らの学びを振り返らせるということを繰り返してきた。そして講義5回目に初めてのG.D.&Pr.が行われた。（90分中、G.D.40分、Pr.25分、ワークシート記入5分、残りは授業者からの説明・指示）。論題は「〈戦争〉に関する価値問題（是非論）」で「戦争はよいことか、悪いことか、その理由も詳しく記してください。この問題を考える前にあらかじめ考えておくべきことがあると思う場合には、それらをすべて列挙し、それらに答えられる範囲で答えた上で最初の問題を考えなさい」である。この回は初めてのG.D.ということから「聴く\*語る経験を通して、〈戦争と平和〉に関する自分自身の出発点の確認」という意味をもっていた。G.D.後グループごとにPr.を行い、どのグループ

のPr.が最もよかったかを各自ワークシートに記入させた。講義第6回目は前時のG.D.&Pr.のねらいを小野原が受講者に説明し、全体での振り返りと意味づけを行った。

つづく講義第7回目は、「戦争賛美論（肯定論）の根拠を思いつく限り列挙し、1つでも多く考えることができたグループからプレゼンテーションを行う」という論題とルールで第2回G.D.&Pr.が行われた（G.D.25分、Pr.25分、ワークシート11分、残り説明・指示）。この回の特徴は「戦争を肯定（賛美）する」という発想の〈超日常〉性を受講者が経験したことにある。〈戦争と平和〉を考えていく上での不可避の課題として「人はなぜ戦争をするのか」という問いは、現に行われている戦争を正当化する論拠が存在するからこそ成り立つものである。したがって小野原は、受講者が日常では考えつかない論題について〈超日常〉的思考が求められる場を体験させることにG.D.のねらいを据えた。戦争肯定について1つでも多くの論拠を考えるという論題は、1人では複数の可能性を考えることの難しい経験であるからこそG.D.に相応しい論題であったといえる。

講義第8回目から12回目まではキリスト教的正戦論など「戦争部分肯定／部分否定論」と、ガンディーの非暴力抵抗やカントの永遠平和論など「戦争全否定論」についてワークシートと講義によって学んでいった。最終講義日の第13回目は、こうした流れを受けて〈戦争〉に関する価値判断を受講者に問う第3回G.D.&Pr.の場が設けられた。論題は「戦争に対して①全肯定、②部分肯定／部分否定、③全否定という3つのうちいずれの立場に立つかを明らかにした上で、なぜその立場に立つことが正しいと言えるのか、できるだけ詳しく論証しなさい。その際、他の2つの立場から加えられうる反論や再反論も予想した上でそれにきちんと答えること」である。本論題は期末テストと同一の課題であり、12回にわたる学習経験をふまえ、これまで学んだこと、考えたことを総動員させ、単なる「賛成反対」というレベルではなく、自分自身の価値判断とその正当性を主張するための論拠を考えるというまとめの段階に位置づいている。

### 3. 「〈聴く〉こと＊〈語る〉こと」による学びは学生の主体性形成にどう作用したか

今回のG.D.&Pr.が目指したものは、講義型授業における学生の主体的な学びの支援にあった。「聴くこと＊語ること」によるG.D.&Pr.を通して、受講者はこの〈教室〉に〈正解〉がないこと、さらに〈暗記〉が通用しないことを経験した。ワークシートでは書き言葉での思考と表現を求められ、それに対しての意味づけは、授業中に小野原からのフィードバックで行われたが、ワークシートは主として授業者とのやりとりのツールとして機能していた。それに対し、G.D.ではグループ内の他者に対して、さらにPr.では全受講者に対しての「考えの言いつばなし」が許されない、多くの他者と自ら直接的にかかわることを必要とした授業空間となっていたと考えられる。

G.D.だけではなく、Pr.までを授業内で行ったことについて授業者自身は「果たして必要だったか」とふり返っている。この点に関しては、より多くの他者に自分たちの考えを発信することを目標として意識したことで、自分たちの考えを表現するのに適切な言葉を選んだり、より説得力のある論拠を探すことに取り組んだりという、受講者それぞれに自分の考えの発信に対する責任を自覚させ、自分たちの〈学習活動のプロセスへの主体的なかわり〉を産み出したといえる。さらにPr.の場はまた、各グループでのG.D.の全過程を共有できてはいない授業者にとっても、議論の〈プロセス＝プロダクト〉の総合的な評価を可能にしているといえる。